「社会も変えて」は男の身勝手

希望は女子

ボーボワール の思想を手がかりに 2

「20代は若いだけで美しいもの。アラサー女性はかつて自分がブスだったという真実を忘れてる。30代からもてるのはオモロイ女。浴びるように活字を読め、自立しろ！」

そうアジる文章は、湯山玲子にしては当然だった。『快楽上等！』などでジェンダー問題をあけすけに解剖して人気のエッセイスト。しかし、載った媒体は異例だった。20代後半の読者が多い人気女性ファッション誌「アネキャン」。読者人気投票で1位に。連載も決まった。

「今の時代、男に依存して得なことないと、ようやく女子は気づいた」（湯山）

女子に元気がある。ように見える。昨秋出版されて話題の『男性不況』（永浜利広）は「男性向きの仕事が減り、女性向きの仕事が増えた結果、男性の価値が低下」する男性不況が、日本に限らず先進国で進むと書く。「男子よりも女子の方が優秀」とも。

○○○○

そも、女子とは何者か。

「女子には『女こども』と馬鹿にした語感がある」。昨秋『女子と就活』を共著で出版したジャーナリストの白河桃子はそう語る。労働市場では雇用を調節する安全弁扱いもされてきた。

何もかも手に入れたい。その願いをかなえる社会は実現できるのか ＝葛西亜理沙氏撮影

家事・育児の負担 分け合うのが大前提

「でも、一生、女子のままがいい、という開き直りも最近は感じられるんです。女子の本質とは『あれもこれも』。恋しておしゃれしておいしいもの食べて。働きたいし結婚もしたい、出産し、育児が一段落したらまた働きたい。全部ほしい」

元気な女子が働き続ければ仕事一辺倒・会社命の男社会も変えられる。女子こそ閉塞日本の希望の光か？

雇用問題のエキスパート海老原嗣生は、しかし「これ以上女子に無理を強いますか」と首をかしげる。昨秋出した『女子のキャリア』では、出産や子育てでキャリアをあきらめざるを得ない女子の現実を豊富な実証データで示した。

「1980年代までは経済も拡大傾向で夫婦共働きの必要がなく、女子の四大進学率も低かった。そうした条件が崩れ、女性が本格的に社会進出し始めたのが90年代末。そのころ社会に出た現在35歳ぐらいの女子たちに、結婚・出産後もいかに労働市場でがんばってもらえるか、助けられるかが、日本社会を元気にするかどうかの鍵になる」

○○○○

「誰でも年をとれば課長くらいにはなれる」という日本型年功カーブのもとでは、いったん子育てで休職や短時間勤務となると、職場に戻りづらく思う女性も少なくない。対して欧米型は、昇進は一部の〝デキる人〟のみ。大部分は昇進できないが、その分、労働市場への出入りも自由。育児中の女性も働き続けやすい。ただし企業は熟練した女性や高齢者を安く使うので、若者を雇用しなくなりがちに。欧米で若者のデモが過激化する理由の一つだ。

「どちらも一長一短ある。キャリアの前半を年功制、後半が実力主義と両者を接ぎ木したような制度に変わっていくのが望ましい」（海老原）

「職場の女性が3割を超えると、組織が変わる」という実感が海老原にはある。米国の経営学者にも同様の研究がある。「ただそのためには何よりも男がもっと育児や家事をするのが大前提。働け、子供も産め、家事もしろ、と何でも女子に期待することにまずは反省を」と言う。働くついでに男社会の企業風土も変えて、というのは男の手前勝手な〈希望〉だ。

堀江敦子は中学時代から100人以上のベビーシッターをしてきた。キャリア女性の家庭も多かった。「母親1人で育児をしてはいけない」と確信するようになった。子育てを社会でシェアすればみなが幸せになれる――。堀江の発想の原点だ。大学を卒業後IT企業に入社、2010年に「スリール」を起業した。

インターンの大学生を募集し、研修ののちベビーシッターを求める家庭とつなぐ。大学生は基本、無給。かわりに「子育てと仕事の両立の、厳しさと楽しさを事前に知る経験」を得る。

「今のご時世で専業主婦願望の女子学生がまだ半分もいる。この意識を変えれば、彼女と付き合う彼氏も変わる。子育てに参加しない男性もかわいそう。定年退職やリストラで行き場がなくなる男性が多い。子育てさえしていれば、会社と家庭以外に居場所ができる。地域に第3のコミュニティーができるんです」

堀江は「女性も高齢者も障害者も、みなが自立した社会が目標」と紅潮して希望を語る。まだ27歳。

やはり「希望は女子」と口走ってしまった。＝敬称略

（近藤康太郎）

男女の役割分担は「でっちあげ」

「人は女に生まれない、女になるのだ」。女性学の記念碑たるボーボワール『第二の性』は、男女の役割分担は教育によって教え込まれたもの、男性によるでっちあげという異議申し立てだった。ボーボワールはある対談の中で、女性の自立にとって「一番大事なことは働くこと」と語った。続けて「できれば結婚を拒否すること」とも。別の対談では「子どもを産みたいと思ったことは一度もありません」と語った。

対して女子とは「あれもこれもという態度」。職業も結婚も出産も。「今こそ女性学でなく女子学を」と言う人もいた。

ただ、ボーボワールが母親になることを「危険」としたのは「父親も社会も女性だけに子どもの責任を押しつけ（略）育児のために仕事をやめるのは女性」だからだ。日本でもまだ、その枠組みに大きな変更はないように思える。男の意識も制度も変えないで、「男に元気がないから、女子が企業風土を変えて」というのは、新たなトンデモの「おねだり」ではあるのだろう。